

【論文】

## 実在論・観念論・パラドックス

齋藤 暢人

### 0. はじめに

ホワイトヘッドの過程の形而上学 Process Metaphysics は、同時代のウィリアム・ジェイムズの純粹経験 Pure Experience の哲学、アンリ・ベルクソンの純粹持続 *durée pure* の哲学と相通じる精神をもっており、各人の思想は個性的でありつつも時間論の性格を分有している、というのはよく知られた思想史的事実である。興味深いのは、そうした彼らが、時間の本性について論じるにあたり、いずれもゼノンの運動のパラドックスに言及していることである。とりわけ、ホワイトヘッドがゼノンの思想を自身の時間論を確立するための思弁的テストの試料としていることが注目される。ゼノンのパラドックスは、現代形而上学の成立にあたっていかなる役割を果たしたのであろうか。

ジェイムズ、ベルクソン、ホワイトヘッドはいずれも実在論者であるが、彼らの前に主たる論敵として立ちはだかったのはブラッドリの絶対的観念論である。それを支える思想的基盤である内的関係説（関係の非存在の主張）は、その論証構造からみて、ゼノンの運動のパラドックスとの親近性を強く示唆する<sup>1</sup>。運動の否定と関係の否定という主題の差異はあれ、もしこれらが本質的な部分で同一の論証であるなら、現代の思弁的形而上学の形成過程は、ゼノンのパラドックスに刺戟された議論の発展過程として理解することができるのではないか。つまり、現代の実在論は、ブラッドリの絶対的観念論の姿をとって現代に蘇ったエレア派的思想の克服によって成立したのでは

ないか。

また、ゼノンとブラッドリを結びつけることにより、それらに共通の論証構造を抽出することができるが、これによって、通常はエレア派との関連が取り沙汰されることがない現象学派の思想のなかにも類似したパラドックスをめぐる論争の形跡が認められることから、現代の实在論の範囲は通常よりも広くとることが可能となる。エレア派的なパラドックスに注目することで、思想史を大きく再編することが可能であるように思われるのである。

議論は以下のように進む。まず、ホワイトヘッドによるゼノンのパラドックス批判は時間論の一形態を帰結する (1)。次いで、ゼノン批判の裏にはブラッドリ批判が隠されており、それは实在論を帰結する (2)。同様のパラドックスが独逸学派のトワルドフスキによっても示されているが、現象学派はその克服を意図して興った (3)。また、そのパラドックスは本来のゼノンのものに近いものでもあるが、やはり解決可能である (4)。さらに、パラドックスの解決法にはさらに少なくとも二つの可能性がある (5)。様々な可能性を総合すると、最終的には、多元論と時間の实在論の結びつきが明らかとなる (6)。

## 1. ホワイトヘッドとゼノン

ホワイトヘッドは主著『過程と实在』第二部第二章第二節でゼノンのパラドックスに言及している。その目的は、パラドックスを回避する方策を示すことを通じて自身の時間論を開陳することである。つまり、ゼノンのパラドックスは、ホワイトヘッド形而上学の基本性格を決定づける一要因である。

ホワイトヘッドがパラドックスを検討して導いた結論は、後述するように時間の原子論であるが、そこに至る一連の論証をチャペルは明快に分析している。まずはそれにしたがって、ホワイトヘッドがいったい何を論じているのかを確認しておこう。

さて、ゼノンの運動のパラドックスには以下の四種類が知られている<sup>ii)</sup>。

- (Z1) 二分割のパラドックス (以下「二分割」)
- (Z2) アキレウスと亀のパラドックス (以下「アキレウス」)
- (Z3) 矢のパラドックス
- (Z4) 競技場のパラドックス

しかし、ホワイトヘッドはこれらのすべてを検討しているわけではない。彼が明示的に言及するのは (Z3) の矢のパラドックスである。しかしながら、その所論を検討してみると、実際に議論しているのは (Z1) の二分割であろう。明らかに、ホワイトヘッドは体系的形而上学者として、ゼノンの思想の文献的研究を試みてはおらず、これらのパラドックスに共通の無限後退の惹起という思弁的帰結に関心をもっているものと思われる。われわれとしては、このこと自体の当否はここでは問わないが、こうした緩やかな言及が引き起こす解釈上の混乱について考察することにより、ホワイトヘッドの思想を読み解く鍵が得られる。これは現代の实在論的哲学の根本問題に光を投げかけることに通じるであろう。

ホワイトヘッドの議論をチャペルは次のように分析している<sup>iii</sup>。ホワイトヘッドはゼノンの議論を単純に反復しているわけではなく、その主張を、次のような二つの前提を補足することによって一般化している。

- (P1) 何かが存在する。
- (P2) 時間的延長は分割可能である。

この前提からの帰結について確かめておこう。この両者が同時に主張されているとき、(P1) により、ひとつの過程のなかには何らかのものが持続しているが、(P2) により、その時間的延長が分割できる。このような操作は明らかにいくらでも反復することができ、したがって無限後退が生じる。

このパラドックスから逃れる道は、(P1) と (P2) のどちらかを否定する以外にはない。つまり、(P1) を否定して「何も存在しない」という結論を導く

か、あるいは、(P2)を否定して「時間的延長は分割不可能だ」という結論に至るかの二つに一つである。ここで(P1)を否定するのはすべてを直観に委ねる非合理主義的な戦略であり、より知性主義的なホワイトヘッドは(P2)を否定するであろう。すると、ここから時間的延長は分割不可能であるという結論が得られるが、まさにこれをホワイトヘッドは主張し、時間が分割不可能で最終的な単位からなることを認めるのである。このことをホワイトヘッド自身は時間がエポックからなる、と表現するが、より直接的に言えば、これは時間の原子論である（『過程と実在』第一部第三章第三節）。

かくして、ゼノンのパラドックスを引き合いに出して、ホワイトヘッドは特異な時間論を導いた。時間は通常ひとつの流れとして表象されるので、それは何らかの連続的なものであると観念されるのが一般的であろう。しかしホワイトヘッドは、こうした常識的な時間概念を、ゼノンのパラドックスへの抵触を理由に斥けるのである。いまや時間においては、最小の事象が生成消滅するが、それが分割可能な長さで持続することはない。ホワイトヘッドは、時間と連続の関係について、「生成の連続ではなく、連続の生成がある」と述べている<sup>iv</sup>。この表現には幾分深い含意がありそうであるが、大まかには、連続があるのではなく生成がある、と言い換えることができるであろう。時間を、いわゆる実体に特徴的な持続という相ではなく、生成消滅という相においてとらえるのである。

こうしてみると、ゼノンのパラドックスとホワイトヘッド形而上学の関係はそれほど単純なものではない。ホワイトヘッド形而上学はゼノンのパラドックスの一部に関わるに過ぎないのであり、ホワイトヘッドによるパラドックスの理解も当然のことながら自身の主張に引き付けたものであろう。

にもかかわらず、ホワイトヘッドのゼノン批判が重要に思われるのは、それがパラドックスの再検討を促し、問題をさらに深く認識するための一助となるからである。ゼノンのパラドックスをめぐっては古来多くの論争が繰り広げられてきたが、ホワイトヘッドが関与している形而上学的論争はこうした難問に新たな光を投げかけるのである。たとえば、ホワイトヘッドの議論

を参照することにより、パラドックスを新たな視点から分類することができる。ゼノンのパラドックスのうち、(Z1)の二分割と(Z2)のアキレウスはよく似たものであり、これらの関係についてはこれまで二つの解釈が生じている。すなわち、両者を同一とする解釈と、異なるとする解釈である。

そもそもゼノンのパラドックスを伝える原資料であるアリストテレスの論考は両者を同一視している。しかし、チャペルが指摘するように、これらを異なるものとみることも可能である<sup>v</sup>。その根拠は、両者において記述される運動の種類が異なるからである。二分割は、運動が開始されず、ついには出発しない、というパラドックスであり、後退的 regressive である。それに対して、アキレウスは、運動が目的とするものに到達しない、というパラドックスであって、前進的 progressive である。後者にあつては運動が少しずつ進行するが、前者にあつては運動が少しずつ抑制される。その様子を段階ごとに観察するならば、本来の運動に逆行する何らかの作用が進行するようにみえるであろう。

筆者もまた、両者は異なるパラドックスであるとみる。ゼノンのパラドックスは運動のパラドックスであるから、両者の差異は後退と前進という運動の二つの方向として現れているのである。

だが、ここでより抽象的な観点からこれらの差異を記述することができるのではないか。(Z1)の中に含まれる本質的な主張は運動の無限分割の可能性であり、したがって(Z2)においてそれに対応するのは、目的地までその過程を無限に継続しうる、という主張であるはずである。この場合の継続はもちろん運動の継続であるが、これを運動に運動を継ぐことだと解するならば、それは運動の総合を意味するであろう。したがって、ここで主張されているのは、運動の無限の総合の可能性ということになるであろう。

このように考えるならば、両者の違いは運動の方向の違いにあるのではなく、分割すなわち分析と総合という、知性によって対象に加えられる概念的操作の違いにあるとすることもできるであろう。それゆえ、これらをそれぞれ、分析のパラドックス、総合のパラドックスと呼ぶこともできるであろう。

ゼノンの四つのパラドックスは、いずれも無限後退のパラドックスであるとして一括りにされがちである。しかし、それが何の無限後退なのか、いかなる無限後退なのかを考えると、これらのパラドックスを同一視するのはやや乱暴である。アリストテレスの「第三の人間」論もまた、よく知られた無限後退のパラドックスの一例である。これは共通の「人間」が次第に増えてゆくというものであるが、二分割とアキレウスのどちらに近いのであろうか。敢えて言えば、これは総合のパラドックスに近いのではなからうか。こうした事例をみてもパラドックスの区分には意味がある。

また、ブラッドリが提示した関係のパラドックスもまた無限後退であり、明らかにゼノンのパラドックスに類似している。しかし、両者は無関係であるとみる者は少なくない。古典学者の立場では、両者の間に明確な関係を認めることは難しいであろう<sup>vi</sup>。少なくとも、ブラッドリにゼノンへの言及があればよいが、そうした明確な証拠は欠けているのである。

しかしながら、今日におけるゼノンのパラドックスに関する哲学的関心の高まりを用意した第一人者の見解によれば、ゼノンのパラドックスの現代的研究の起源はラッセルの分析に求められる<sup>vii</sup>。そうであるとすれば、実在論者としてのラッセルの主要な論敵がブラッドリであったという事実は無視すべきものではないであろう。ブラッドリの絶対的観念論の思想的出発点がゼノンを想起させるパラドックスであったからこそ、ゼノンのパラドックスへの挑戦が現代においても喫緊の思想的課題のひとつだと認識されたのではあるまいか。

## 2. ゼノンとブラッドリ

以上から、ホワイトヘッドはゼノンのパラドックスを自身の時間論を展開するために利用していると言える。これはひとつの真理であろう。

しかし真理のすべてではない。マクヘンリーによれば、ゼノンのパラドックスへの言及は、実はブラッドリの関係のパラドックスへの反論を意図したものである<sup>viii</sup>。冒頭で述べたように、ゼノンのパラドックスはブラッドリ

のパラドックスを想起させるが、それは、両者がともに無限後退を惹起するという点でよく似ているからであり、そうである以上、前者を後者と見立てて議論の俎上に載せるのはありうることであろう。

しかし、そうであるとする、ここでひとつの問題にぶつかることになる。ブラッドリのパラドックスが似ているのは、ゼノンのパラドックスのなかでも (Z1) の二分割ではなく、(Z2) のアキレウスなのである。

ごく大まかにいえば、ブラッドリの関係のパラドックスとは、外的関係が関係項を総合することができず、さらにそのための関係を要請する、というものである。これは明らかに関係の要請に関する無限後退を惹き起こす。この無限後退は、複数のものが更なる総合を要請することとして理解できるであろう。したがって、これは、ゼノンのパラドックスのなかでは、(Z2) の前進的なパラドックスに類似したものであり、われわれの用語で言えば総合のパラドックスなのである。

先に述べたように、ゼノンのパラドックスのうち、(Z1) と (Z2) は区別すべきものなのであった。それゆえ、ここでホワイトヘッドが何を批判の対象に選んだのかは、正確にしておかなければならない事柄である。

もしホワイトヘッドが、ゼノンのパラドックスを批判することで同時にブラッドリのパラドックスをも葬り去ろうと考えていたのであれば、ホワイトヘッドが (Z1) の二分割を論じているのはやや理解しがたい選択である。そのブラッドリ批判が正鵠を射ているとは言えない可能性が出てくるからである。

だが、もし二分割の代わりにアキレウスを選んでいたらどうなったであろうか。批判それ自体は可能であるかもしれないが、このときすぐにある問題が思い浮かぶ。それは、そのときには、前節において確認したような、ゼノンのパラドックスの批判から時間論を導くという論証が成り立たなくなるかもしれない、というものである。しかも、アキレウスのパラドックスに関しては、ホワイトヘッドは無限級数論で片づけることができる、と一蹴している。

こうしてみると、ホワイトヘッドの議論の運びには建付けが悪いところがあり、議論が噛み合わなくなっている。しかし、そうした不整合のゆえに全体を切り捨てるのではなく、この議論全体からなるべく多くの形而上学的知見を得ようとするならば、われわれはここでどうするべきなのであろうか。

明らかに不足しているのは、ゼノンのパラドックスの多様性に関する認識と、ブラッドリのパラドックスとの違いに関する認識である。われわれは、ゼノンとブラッドリを関連づけて考察する立場を採ってはいるが、しかももちろんこれらは無造作に同一視できるものでもない。ブラッドリのパラドックスは関係のパラドックスであって、運動のパラドックスではない、といった違いは無視できないであろう。

そう考えると、ここでもうひとつのパラドックスが成立する可能性が出てくる。それは、二分割のパラドックスを、アキレウスのパラドックスに關係のパラドックスが対応するのと同様に一般化したパラドックス、一般化された分析のパラドックスである。

このようなパラドックスは、実はすでに別稿で論じたもので、所与のパラドックスと名付けることができるものである<sup>ix</sup>。ひとつのものとして与えられたものを分割するためにはそのものに加えて分割が必要であるが、さらにそれを区別するためには更なる分割が必要である、というように要請すると、分割のための分割が次々に登場して無限後退へと導かれるのである。

かくして、ゼノン批判とブラッドリ批判が交錯することによって、議論は見かけ以上に複雑なものとなっているように思われる。この状況は次のように整理できよう。

**【表1 パラドックスの分類】**

	運動のパラドックス	より一般のパラドックス
分析 (後退的)	二分割	所与のパラドックス
総合 (前進的)	アキレウス	関係 (ブラッドリ)

このように整理したうえで、われわれにはどのような問題が残されているのかを考えてみよう。

運動のパラドックスのひとつとしてのアキレウスは、無限級数論によって処理できるかもしれない。しかし、そのような解決は、それを一般化したブラッドリの関係のパラドックスをも処理しうるものではないであろう。

また、ホワイトヘッドは二分割を解決することでブラッドリのパラドックスをも解くことができると信じたのかもしれないが、そのためには二分割とアキレウスが同じパラドックスである必要がある。しかしその可能性は低く、したがってホワイトヘッド自身の戦略も望みが薄い。

したがって、ホワイトヘッドがブラッドリのパラドックスを論駁しようとしていたのなら（もちろんそれを直接攻撃してもよいのであるが）、先述のように、アキレウスのパラドックスのほうを論駁するか、あるいは一般化された分析のパラドックス、所与のパラドックスを批判する必要があったのではないか、と思われるのである。

所与のパラドックスについては、のちに別のパラドックスにおける解釈の可能性のひとつとして取り上げることにしよう。すると当面の問題は次のようなことである。すなわち、ホワイトヘッドによるアキレウスのパラドックス批判があるとすれば、それはいかなるものか。

そのような議論をもちろんホワイトヘッドはしていない。そこで、ここからは先のチャペルの分析を参考に、アキレウスの解決を自力で試みることになる。

二分割においては、運動の主体があることと、運動が無限に分割されることが前提されていたのであった。アキレウスが生じるためにも類似した前提があるように思われる。それは次のようなものであろう。

(P3) 異なるものが運動している。

(P4) 両者はそれぞれ無限に多くの経過をたどりうる。

運動のパラドックスからこれを一般化したものは、次のような前提をもつパラドックスとなるはずである。

多がある。

無限綜合可能である。

ここで (P3) を否定するならば、それは多の存在を否定することであるから、一元論をとることになる。これは明らかにブラッドリの絶対的観念論の立場に接近する。

しかし、無限綜合可能性を否定することもできるであろう。アキレウスが亀に追いつくというある運動を認めることでゼノンのパラドックスが回避できるように、関係項が関係を構成することを認めることでブラッドリの関係のパラドックスは回避される。

この議論、すなわちゼノンのアキレウスのパラドックスへの反駁がなぜブラッドリの関係のパラドックスへの反駁になりうるのかは次のように説明できる。

ゼノンの議論のなかには、それほど明確ではないものの、次のような無限綜合可能性の主張が含まれていると考えられる。

異なる個体が無限に多くの経過をたどりうる。

他方で、ブラッドリの関係のパラドックスのなかには、次のような主張が含まれているようにおもわれる。

異なる項が無限に多くの関係をもちうる。

これはゼノンにおける無限綜合の可能性と同類のものであり、したがって、両者に共通の無限綜合の可能性を否定するならば、ゼノンの論駁は同時

にブラッドリの論駁になりうるのである。

### 3. トワルドフスキの全体と部分のパラドックス： 無限の現象学

しかしながら、アキレウスおよびその一般化としての総合のパラドックスは、ブラッドリ形而上学に特有の帰結ではなかったように思われる。いまわれわれが考察しているのと同時代の思想である現象学、またその起源である独逸学派のなかには、これと同様の理論的内容をもつパラドックスが登場しているのである。独逸学派の主要メンバーの一人に数えられるトワルドフスキは、主著『表象の内容と対象』において意識の精密な分析を展開した。その豊かな成果は本来もっと注目されて然るべきものであるが、ここではその一部である議論の帰結に注目したい。それは、意識を一つの全体とみた場合に生じる、部分の存在に関する不合理な結論である。それはやはり一種の無限後退であって、これまで論じてきたゼノンやブラッドリのパラドックスを連想させずにはおかないのである。

トワルドフスキによれば、意識は一般に複数の部分からできているが、そのなかには感覚内容のような質料的（資料的、素材的）部分以外に、意識の構造を規定するような形式的部分がある<sup>x</sup>。いま、これがたしかに無限後退を惹き起こすということを確認しておこう。

全体は全体とその部分との統一体であるが、その統一それ自体もまた部分であるとすれば、全体はまた新たな部分とその部分とすることとなる。もちろんこの新たに生成された部分もまた全体との統一体であり、したがって新たな統一をさらに新たな部分としてもつことになる。このようなプロセスは明らかにいくらでも反復することができ、したがって形式的部分の導入は無限後退を惹き起こすのである。

いくらか図式的に述べなおせば次のようになるであろう。全体  $G$  が部分  $T$  をもつとする。つまり、これらのあいだには所有関係  $h$  があり、状況を  $G-h-T$  と書ける。ここで  $h$  もまた  $G$  の部分であるとすれば、 $G$  と  $h$  のあいだ

に所有関係  $h'$  があることとなり、 $G-h'-h$  となる。このような  $h'$  に対しても  $h''$  がある、などとして無限後退が生じる。

このパラドックスには通用する名前がないのであるが、それでは不便であるから、ここではトワルドフスキの「全体と部分のパラドックス」と呼ぶこととしよう。これはブラッドリの関係のパラドックスとよく似ているが、まったく同じものではない。これはむしろ中世哲学における形而上学的難問、ものの一体性 *unum* を当のものが部分としてもつとすると、無限後退が起こる、という問題との関連性を想起させる（トワルドフスキ自身が中世哲学との関連性を注意している<sup>xi</sup>）。

しかし、このパラドックスは、ブラッドリが提示した関係一般に関するパラドックスではないが、所有関係あるいは部分関係をひとつの項とみなしうること、それもまた全体を部分として構成するために新たな所有関係を必要とする、ということから導かれており、したがって関係のパラドックスの一種であると言える。それゆえ、このパラドックスはブラッドリのパラドックスと実質的には同じものである。

トワルドフスキ哲学に関する優れた論考であるキャヴァリン Cavallin の研究はブラッドリには言及しないが、上述の分析と再構成によって両者の思想の親近性は明らかであろう。そして、この無限後退に関してキャヴァリンは非常に重要なコメントを残している。トワルドフスキの哲学は厳密な方法論に基づく新しい心理学であることを志向していた。しかし、ここから不合理な結論が導かれることにより、よりのちの世代であるエーレンフェルス、ジェイムズ、ベルクソン、フッサールらは、トワルドフスキとは異なる心理学、あるいは意識の哲学を求めてそれぞれ独自の立場を確立していった、というのである<sup>xii</sup>。

ここに登場する実在論者たちのうち、とりわけジェイムズとベルクソンにとっては、克服すべき独断的形而上学は明らかにブラッドリの哲学であった。そうしたかれらの立場をトワルドフスキの哲学への批判として読み替えてよいのだとすれば、エーレンフェルスやフッサールのトワルドフスキ批判

をブラッドリ批判と読み替えることもまた可能となる。

また、既述のように、ジェイムズやベルクソンらはいずれもゼノンのパラドックスを考察の材料としている（ジェイムズ『哲学の諸問題』「一と多」、ベルクソン『物質と記憶』『創造的進化』第四章）。それに対して、フッサールは直接ゼノンには言及しない。このかぎりでは、同時期の形而上学の中で現象学は特異である。

しかしながら、このトワルドフスキの全体と部分のパラドックスをブラッドリのパラドックスと類縁関係にあるものと解するならば、それは当然ゼノンのパラドックスの一変奏でもあり、したがって、フッサールの現象学もまたゼノンのパラドックスとの対決の試みのひとつであったと考えることができるであろう。

かくして、こうした新しい意識の形而上学の勃興を促した共通の原因として、エレア派のパラドックスとの対決という課題が浮かび上がってくるのではないであろうか。

全体と部分のパラドックスが発生する原因について少し補足しておこう。先のブラッドリの関係のパラドックスの分析を応用するならば、議論は次のような前提をもつと考えられる。

(P5) 部分がある。

(P6) 部分を無限に付加することができる。

前提(P6)が無限総合可能性であることは言うまでもない。ここで、(P5)を否定するならば、全体が部分をもつことを否定することとなり、したがって全体しかない、つまり一元論となるであろう。フッサールが示した解決は明らかにこれではない。彼は全体を包括する一なるものの要請を否定するのである。この処置は実質的には(P6)の無限総合可能性の否定であり、関係が無限に増殖することを阻害する。

このフッサールの解決は、アキレウスやブラッドリの関係のパラドックス

に対して可能な解決の方法としてさきほどわれわれが提示したものと一致している。そして、その結論として、一元論の否定、多元論を帰結するのである。

#### 4. 全体と部分と分析

しかしながら、全体と部分のパラドックスには別の解釈の可能性もある。これを総合のパラドックスではなく、分析のパラドックスとみなすこともまた可能なのではないであろうか。いま、何らかの対象が全体として所与であるとして、これを分割することを考える。最小の分割はこれを二分することであろう。この操作はゼノンの二分割と同じであり、それゆえこのパラドックスは分析のパラドックスに分類可能なのである。パラドックスが具体的に生じるのは、分析の結果生じた二つの部分のみならず、分割そのものまでもその部分とするときである。トワルドフスキの立場では、これが形式的部分として認められるであろう。しかしもしそうであるとすれば、結果として生じる部分以外に部分があることになり、さらにこれらを区別するなんらかのものが部分として含まれていることになる。このような区別には常に新しい部分が伴うことになり、したがってここには無限に多くの部分があることになる。

この議論の前提を、一なる全体が分割されていることだとみて、この無限後退を矛盾とみて帰謬法を適用すると、否定されるのは分割であるから、否定されるのは多元論であり、したがって一元論が帰結する、ということになるかもしれない。しかし、そのように解する必要はなく、前提をはじめに置かれた一なる対象の存在であるとすれば、帰謬法によって否定されるのは所与の一なることである。

この場合、所与における統一が否定され、そこには諸部分があることになる。これらのあいだの関係は内的なものではなく、外的なものであろう。一の否定は内的関係の否定と整合する。ジェイムズの言うモザイクの哲学とはこうしたものではなからうか。

この解釈には次のような意義がある。つまり、先のホワイトヘッドのゼノンのパラドックス批判には解釈の余地があり、その帰結は確定してはいなかったが、この解釈によってそれに伴う問題は回避できる。

ホワイトヘッドは、二分割のパラドックスを克服することでエポック的時間論、時間の原子論をとる、つまり、パラドックスが時間論の基礎になっているのであった。おそらく、これと同様の議論がトワルドフスキの全体と部分のパラドックスにおいても可能である。つまり、トワルドフスキのパラドックスを克服することにより、何らかの時間論が提示されるのである。ところで、フッサール現象学の基本性格を明瞭に表すテーマは内的時間意識の現象学なのであった。つまり、現象学は根本において時間論であると言える。こうした現象学の基本性格の起源をそのトワルドフスキ批判に求めることができる。

ただし、現代形而上学における多様な時間論のそれぞれの性格は千差万別である。ジェイムズ、ベルクソン、フッサールなどの実在論者はいずれも個性的であり、ホワイトヘッドの時間の原子論を無条件に受け容れるということとは考えにくい。

ただ、時間の原子論のより抽象的な意義については、彼らの間で一定の合意が成り立つ可能性はある。彼らは、時間の流れというものを強調しつつも、それが根源的には分割できないものであることを認めているようにも思われるからである。この分割不能ということは意識される時間の根本的な性格であり、それを原子論というかたちでとらえることもまた少なくとも可能ではあると言えるのではないであろうか。持続、意識の流れを切断することはできないという主張を、それぞれの文脈に置き入れてみても、それほど奇異には思われまいであろう。

このように、これ以上切ることができないという主張は、流れそのものの性格を強調するものであるとも考えられるし、また、ここにこれ以上切れぬものがあるという、根源的分割の存在を認めるものであるようにも考えられる。通常、現代の意識の形而上学の立場は流れを重視するものとして解釈

されるのであろうが、それが暗黙のうちにこうした根源的な分割を許容するものだとして解釈してよいならば、諸説をホワイトヘッドの立場に近づけて解釈することは不可能ではないであろう。このような根源的な分割は、ローティの言うような、あらゆるタイプの還元主義に反対するものとしての實在論のメルクマールとなるであろう<sup>xiii</sup>。

## 5. 超實在論と非存在論

だが、これまで論じてきた帰結が以外にも、理論的には、さらに少なくとも二つの可能性があるように思われる。それらを順に検討してゆこう。

はじめに、現象学派を取り巻く知的環境のなかの可能性に注目したい。当時の思想状況の多様性と豊かさがうかがわれる現象であるが、トワルドフスキの全体と部分のパラドックスに対する思想的反応は、フッサール現象学のみではない。もうひとつの反応として、マイノクスの超實在論的哲学がある。より具体的には、高次対象の理論がここでの問題に最も関連するであろう。

周知のように、マイノクス哲学はフッサール現象学とともにいわゆる独逸学派を形成していて、トワルドフスキとともにいずれもブレンターノ門下である。それゆえ、全体と部分のパラドックスに関する論争は、独逸学派の内訌の一断面とみることもできる。ここではそうした学派の思想史的展開についてはもちろん、変遷を繰り返したマイノクス哲学の全体像についてすらも、詳細に立ち入ることはできない。しかしながら指摘しておきたいのは、マイノクスの特異な存在論的主張が、ゼノンやブラッドリに類するパラドックスに対してもつ意義ないし理論的帰結の重要性である。

マイノクスは、とくにメロディの知覚などを例に挙げて、個々の心理的要素に基づく高次の対象の存在を認める。それらは一体となって関係あるいは複合体を形成する。これらのあいだの関係をどのようなものとして理解してよいのかは解釈が難しい問題であるが、多様としての個々の所与以外に、それらに基づく統一的なものの存在が認められるということはたしかである

う。この立場がいわゆるゲシュタルト心理学を生み出すことになるのである<sup>xiv</sup>。

重要なのは、マイノクが、関係とその項のあいだで無限後退が生じることに気づいている、という点である。これは明らかにブラッドリの関係のパラドックスに類似した事態である。しかし、マイノクは自説がパラドックスを内包しようということに気づきながら、敢えてそれを無害なものともみならず。このような「解決」は何を意味するのであろうか。

それは、無限後退という帰結を甘受する、ということであろう。では、そのときには何が存在することになるのであろうか。これまでの議論から容易に推定されるように、通常は、無限後退のパラドックスは矛盾とみなされ、そこに帰謬法が適用されることにより、たとえば多元論の否定という存在論的帰結が導かれたのであった。いまこのパラドックスを矛盾とみなさないということになると、初めに措定された多様と統一体のあいだの存在論的な差異は何らの問題も含んでいないということになるであろう。このとき、通常は鋭く論理的に対立し、永遠の角逐を繰り広げているはずの一元論と多元論は、ひとつの形而上学的体系のなかに固定されてしまうのではないか。このときにはエレア派の主張それ自体がおよそ意味をもたないものとなる。これをパラドックスの真の解決と呼んでよいのかどうか疑問はあるが、形而上学的には可能な立場であろう。

しかしながら、こうした「解決」を認めるならば、さらにほかの形での奇妙な「解決」もまた認めざるを得ないように思われる。それは、存在そのものを否定するという形での解決である。これは、ゼノンのパラドックスを含むエレア派の哲学の影響を明らかに受けた、著名なソフィストであるゴルギアスによって提示された非存在論のパラドックスによって示唆されている起死回生の血路である<sup>xv</sup>。

残念ながらゴルギアス本人の著作は失われたが、要約された議論がシリキオスらによって伝承されている。それによれば、ゴルギアスは、何ものもあらぬ、ということ論理的に精密に論証しようとした。それは、あるも

のとはいかなるものかについての可能性を場合分けすることによって組み立てられた一連の論証であり、おおよそ以下のような構造をもっている（一部省略）。

**【表2 ゴルギアスの非存在論】**

- (G1) あるものがある  
 (G1.1) 永遠的→始まりがないから、あらぬ 矛盾  
 (G1.2) 生成された  
 (G1.21) あるものから→すでにある→生成されない 矛盾  
 (G1.22) あらぬものから→生成されない 矛盾  
 (G1.3) 永遠的かつ生成された 矛盾  
 (G2) あらぬものがある 矛盾  
 (G3) あるものとあらぬものがある 矛盾

かくして、あるものを指定するとき、可能な場合のすべてにおいて矛盾が帰結することが示される。ここから、なにものもあらぬ（なにもない）という結論が導かれることとなる。

ゴルギアスの非存在論は明らかにゼノンの運動否定論の影響を受けており、ほとんどゼノンのパロディの域にまで達している。これは、ゴルギアスがゼノンの論法を借りてゼノンの主張を否定した、ということの意味する。しかしながら、その結論は一元論の対極にある多元論ではなく、これらの共通の地盤である存在論それ自体の否定であった。

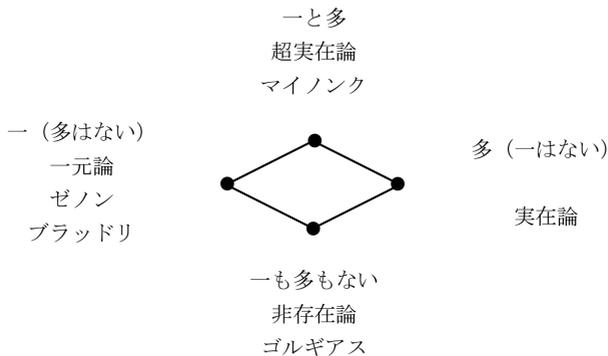
ゴルギアスのパラドックスは典型的なソフィスト的詭弁の一種とみなされることもあるようだが、真正の形而上学的論考のひとつとみなされることもある。筆者としては後者が正しいと思う。論証の正しさは、その構成者・提出者の意図には左右されないからである。

ゼノンに対比されるものとしてのゴルギアス非存在論の登場はやや唐突の印象を与えるかもしれない。しかし、これまでの議論を振り返ってみると、存在論のヴァリエーションとしての非存在論はいままで全く姿を現さなかったわけではないのである。運動のパラドックスへの応答としての非存在論は、

チャペルによれば、極端なベルクソニズムである<sup>xvi</sup>。ベルクソンの存在論を、純粹持続のみを認めて、その担い手であるべき実体を立てないものとし、他方で存在するものは実体に限るという前提をおくならば、それはたしかにここでの非存在論となるであろう。

ベルクソンの思想は深遠で難解である。前節ではその思想を実在論とみなして、時間の原子論に接近させることも試みたばかりであるから、その舌の根も乾かぬうちに前言を翻し、ここでこれを非存在論であると断定することはできない。しかしながら、その時間論につきまとう運動そのものへの志向は、もはや存在を超えたなにかを論じようとするところから生じるものであるようにも見える。存在と非存在のあわいに敢えて立つ姿勢を非存在論と呼ぶこともできるのではないか。

以上のようなゼノンのパラドックスをめぐる諸思想の相互関係は以下のように分類することによって多少明確にできるかもしれない。一元論対多元論という対立軸を用いて思想の特質を浮かび上がらせてみよう。



【図1 存在論の分類】

ここから、実在論の立場が実は特異であるということがわかる。この立場においてのみ、時間の実在性が論じられうるのである。

## 6. パラドックスのもつ意味

これまでの議論を振り返って、ホワイトヘッドによるゼノンのパラドックス批判とは何だったのかを考え、結論としよう。そもそも問題は、研究主題となっているパラドックスがゼノンの二分割なのか、それともブラッドリとの関係のパラドックスなのかという点があきらかにないことにあった。これらのパラドックスを解くことは可能かもしれないが、同一のパラドックスではない以上、それらの分析の意義が一意に定まるとは限らないのである。

ホワイトヘッドが問題にしているのが二分割のパラドックスであるとする。それをゼノンのものとみなして解くとすれば、時間の原子論を採ればよいであろう。そして、このときには自動的に多元論を採ることになる。そうではなく、ホワイトヘッドが標的にしているのが、ゼノンのパラドックスの一般化である分析のパラドックスであるとするならば、部分に関する内的関係説を否定して多元論を採ることができる。

ホワイトヘッドが問題にしていたのがブラッドリとの関係のパラドックスであったとする。そのときにもやはり内的関係説を否定することで多元論を採ることができるであろう。

かくして、ホワイトヘッドの過程の形而上学の基本性格に関わるパラドックスとはいかなるものかについては、いくつか解釈の可能性があるものの、その可能性のいずれにおいても、それらに対する批判の結果、多元論が帰結するという可能性が示された。この事実は、ホワイトヘッド哲学の基本性格を改めて明らかにしたと言える。

ホワイトヘッド形而上学と類似性をもつベルクソン、フッサールらの意識の形而上学は、いずれも関係のパラドックスにあたるものを解いてきたとも考えられるが、それらがいずれも似たような時間論となることの意味もここで説明できる。こうした哲学の基本性格は多元論であり、それゆえ時間の実在性も肯定するのである。

ゼノンの運動のパラドックスを批判するということが時間の実在論となる

ことは自明である。しかし、ブラッドリの関係のパラドックスの批判も多元論であり、時間の実在論となるということ、トワルドフスキの全体と部分のパラドックスへの批判も多元論であって時間の実在性を肯定する立場となる、ということ、それゆえこれらのパラドックスは同類とみなされてよいものであるということ、こうした諸点は改めて確認されてよいことではあるまいか。

## 7. おわりに

本稿ではゼノンのパラドックスとブラッドリのパラドックスから出発して、トワルドフスキの思想を視野に入れつつ、現代形而上学の背景にパラドックスへの応答という思想的文脈が設定できる可能性を検討してきた。現代哲学はいくつもの学派に分かれており、それらのひとつでも完全に理解することはもとより大変困難ではあるが、ここでこのような共通の問題の存在が確認できれば、複雑多岐にわたる思想の発展過程のなかに一筋の論理展開をみることもできるであろう。

## 謝辞

本稿は JSPS 科研費 20K00015 の助成を受けたものである。

### [注]

<sup>i</sup> Salmon (1970: 16, 27), Owen (1967-58/1970)

<sup>ii</sup> Lee (1936)

<sup>iii</sup> Chappell (1961/1989: 71-73)

<sup>iv</sup> Leclerc (1958: 71-78)

<sup>v</sup> Chappell (1961/1989: 72-80)

<sup>vi</sup> Stokes (1971)

<sup>vii</sup> Salmon (1970: 27)

<sup>viii</sup> McHenry (1992: 55f.)

<sup>ix</sup> 齋藤 (2021)

<sup>x</sup> Twardowski (1894/1982: § 10)

- xi Cavallin (1997: 170)  
 xii Cavallin (1997: 172)  
 xiii Rorty (1983)  
 xiv Grossmann (1974: 66ff)  
 xv 山本 (1958), Waterfield (2000)  
 xvi Chappell (1961/1989:73)

## 文 献

[非邦語]

- Cavallin, J., 1997, *Content and Object: Husserl, Twardowski and Psychologism*, Dordrecht: Kluwer
- Chappelle, V., 1961/1989, 'Whitehead's Theory of Becoming', in G. L. Klein, *Alfred North Whitehead: Essays on his Philosophy*, Lanham: University Press of America, 70-80
- Grossmann, R., 1974, *Meinong*, London: Routledge
- Leclerc, I., 1958, *Whitehead's Metaphysics: An Introductory Expositions*, London: George Allen and Unwin
- Lee, H. D. P., 1936, *Zeno of Elea*, Cambridge: Cambridge University Press
- McHenry, L. B., 1992, *Whitehead and Bradley: A Comparative Analysis*, Albany: SUNY Press
- Owen, G. E. L., 1967-58/1970, 'Zeno and the Mathematicians', in Salmon (1970), 139-163
- Rorty, R., 1983, 'Matter and Event', in L. S. Ford and G. L. Klein (ed), *Explorations in Whitehead's Philosophy*, New York: Fordham U. P., 68-103
- Salmon, W. C. (ed.), 1970/2001, *Zeno's Paradox*, Indianapolis: Hackett
- Stokes, M. C., 1971, *One and Many in Presocratic Philosophy*, Cambridge (MA): Harvard U. P.
- Twardowski, K., 1894/1982, *Zur Lehre vom Inhalt und Gegenstand der Vorstellungen: Eine psychologische Untersuchung*, München: Philosophia (川村安太郎訳, 1929, 『表象の内容と対象』, 岩波)
- Waterfield, R., 2000, *The First Philosophers: The Presocratics and Sophists*, Oxford: Oxford U. P.

[邦語]

齋藤暢人, 2021, 「内的関係説の形而上学的含意」『中央学院大学現代教養論叢』

3(1), 1-27

山本光雄, 1958, 『初期ギリシア哲学者断片集』 岩波

## Realism, Idealism, and Paradox

SAITO Nobuto

**ABSTRACT**

It is a well-known fact of history of philosophy that Whitehead's Process Metaphysics has a common spirit with William James's philosophy of pure experience and Henri Bergson's philosophy of *durée pure* of his contemporaries. What is interesting is that they all refer to the Zeno's paradox of motion in discussing the nature of time. It is noteworthy that Whitehead uses Zeno's ideas as specimens for speculative tests to establish his theory of time. What role did Zeno's paradox play in establishing modern metaphysics?

James, Bergson, and Whitehead were all realists, but Bradley's Absolute Idealism stood before them as their main opponent. The theory of internal relations (the non-existence of relations), which is the foundation of his philosophy, strongly suggests an affinity with the Zeno's paradox of motion with respect to its structure of argument. Despite the difference in subjects of the motion and relation, if they are essentially the same argument, then the process of formation of modern speculative metaphysics can be traced to the development of arguments stimulated by Zeno's paradox. In other words, it can be understood that modern realism may have been established by overcoming the Eleatic school of thought, which has revived in modern times in the form of Bradley's Absolute Idealism.

Also, by linking Zeno and Bradley, we can extract the common argumentative structure in the phenomenological philosophy, which is usually understood to have no connection with the Eleatic school. Evidence of disputes over similar paradoxes allows the scope of modern realism to be broader than usual. By paying attention to the Eleatic paradox, it seems possible to greatly reorganize the history of thought.